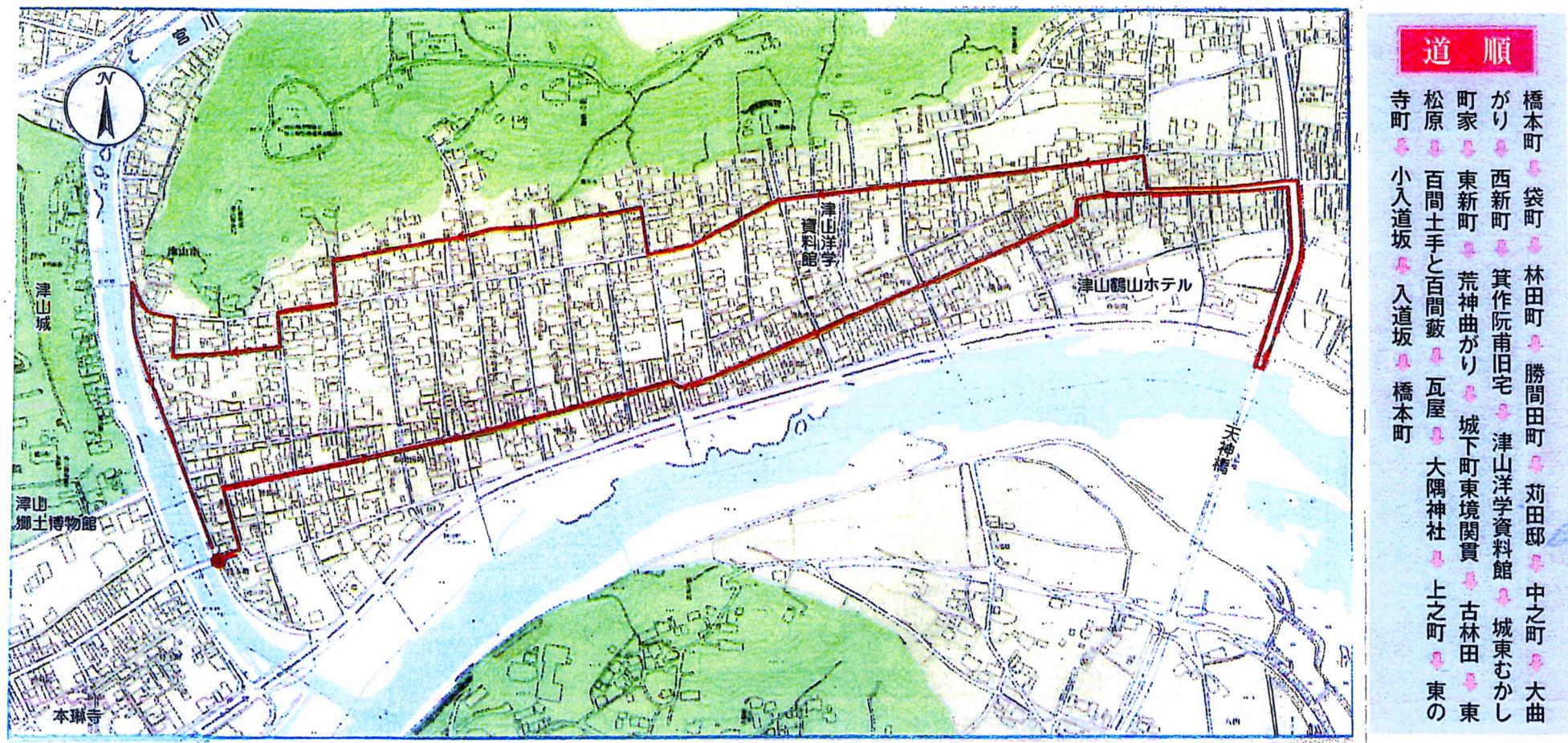


# 第5回「絵図で津山城下町を歩く会」

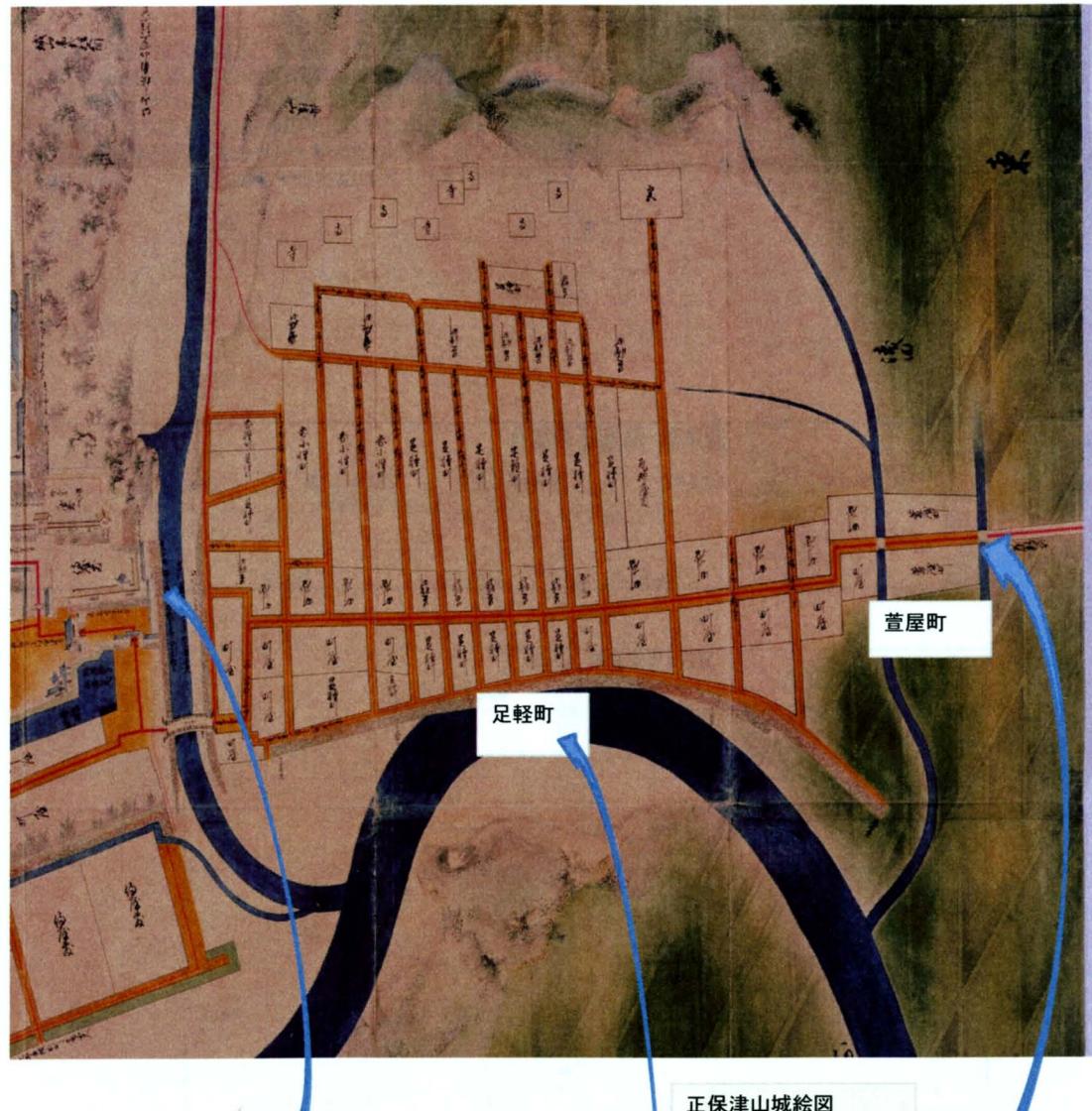
日時：2017年9月3日（日） 13時～15時30分頃

講師：津山郷土博物館館長 尾島 治 氏

主催 津山観光ボランティアガイドの会



■第6回「絵図で城下町を歩く会」は12月3日(日)です。是非ご参加ください。



江戸時代の初期には、この袋町から対岸に宮川大橋が架けられており、橋が南に架け替えられることによって、現状の橋本町ができたという伝承が、『鶴府古談』に書き残されている。関連は不明ながら、近年、この付近の宮川の川底から、丸い穴を穿った数個の礎石が見つかり、津山郷土博物館に収蔵されている。

『武家聞伝記』巻第十五によれば、正保2年(1645)の春に、古魚町の突き当たりにあった町奉行屋敷と共に、「林田町」と「新町」との間にある「足軽屋敷」の町屋敷地への変更が決定された。

正保の絵図では「萱屋町」となっている。この萱屋町は、城下町の東西の端に意図的に置かれていた。ただ、西の萱屋町は安岡町と共に、後に城下町に編入されたが、東の萱屋町は、城下町に編入されることはなく、その名は消えていった。

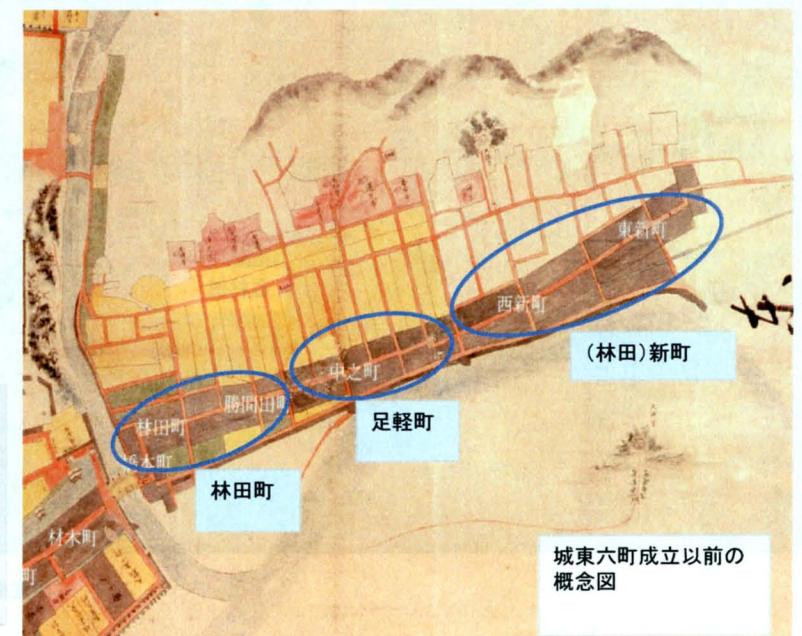
元和3年(1617)に成立したとされる「林田町」は、橋本町・林田町・勝間田町を含む総称としての「林田町」であり、足軽町の東部に成立した町並みを、「林田町」に対する「新町」と称したのである。この「新町」が、時には「林田新町」とも呼ばれたということになる。

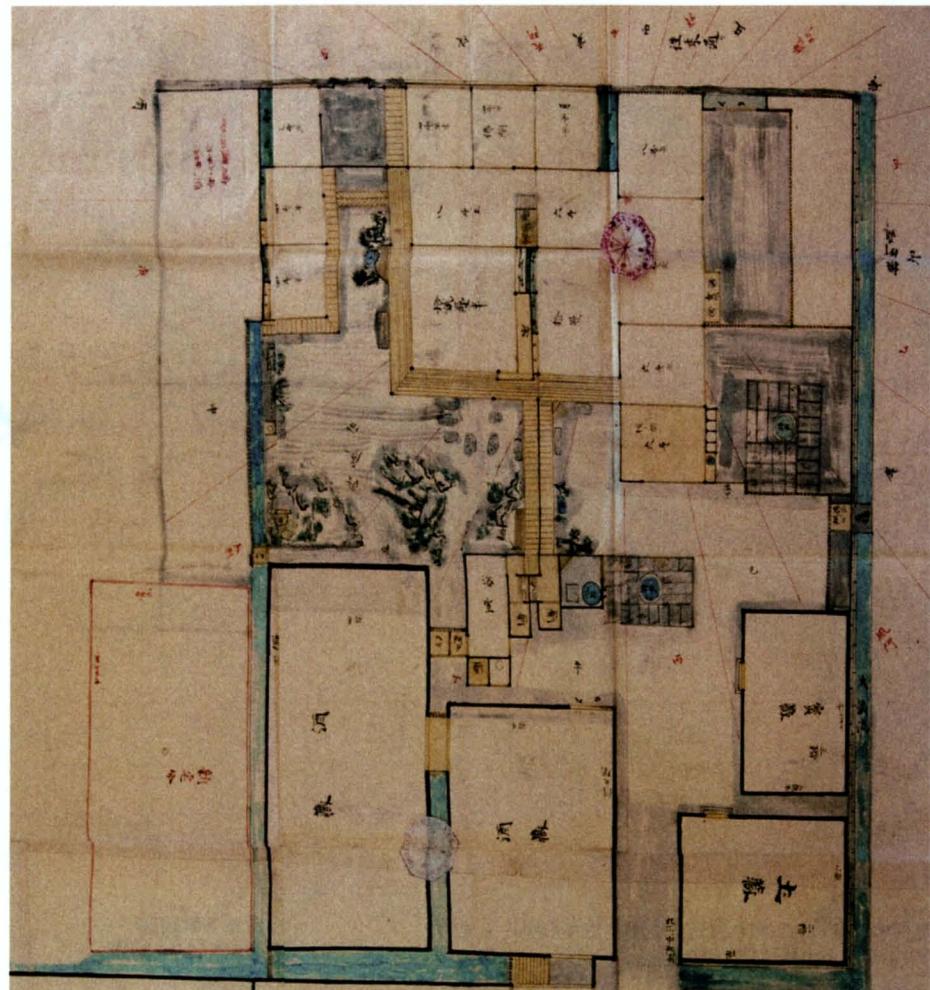


城東地区の六町には、南北に走る小路が数多くあり、上之町から往来に接続する小路には、それぞれ名前が伝えられている。

伝承により多少の混乱はあるが、概ね、西から、美濃屋小路・三須屋小路・国信小路・関貫小路・梅檀小路・長柄小路・松木小路・福田屋小路・蘭田小路・札場小路・大隅小路・(東)美濃屋小路・瓦屋小路の十三本である。

津山城下町絵図  
享保8年(1723)頃





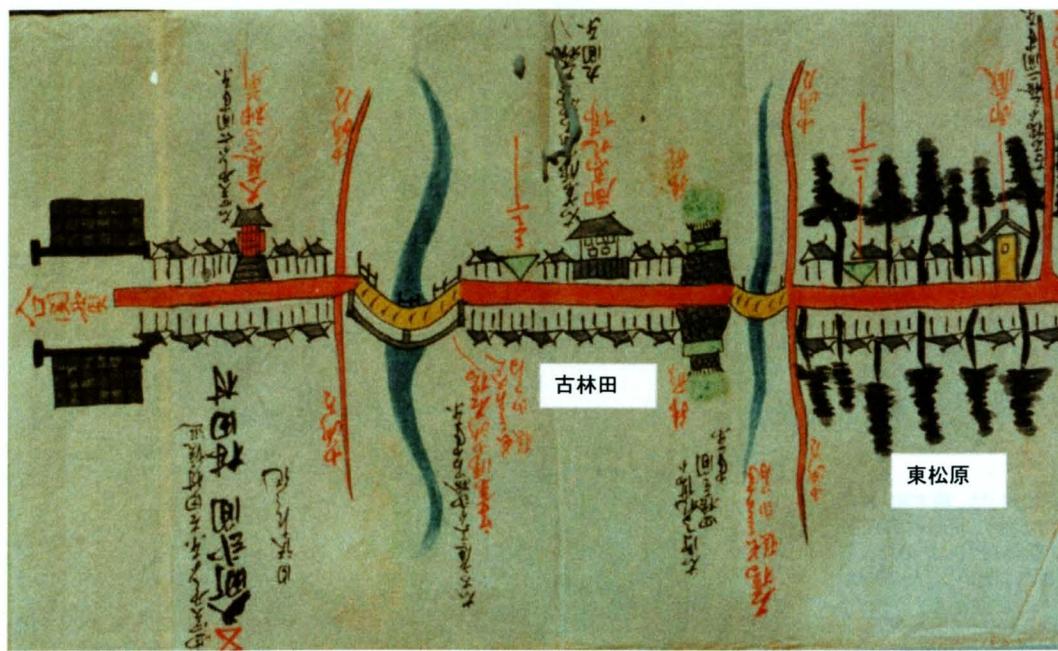
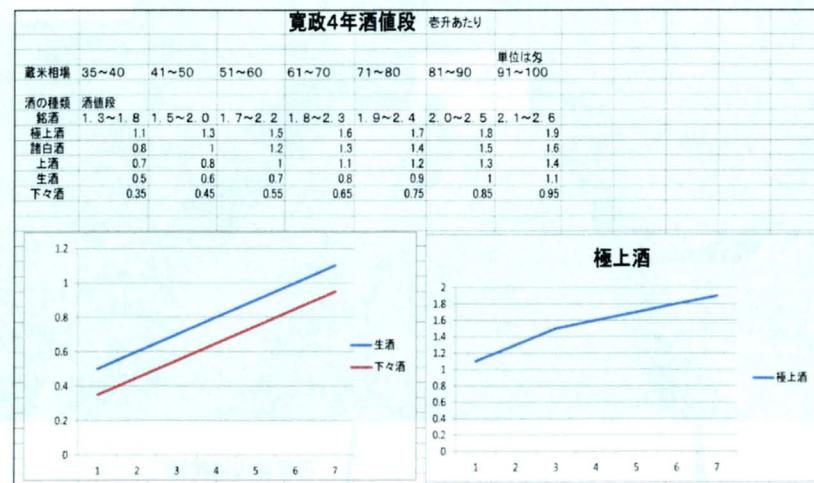
苅田家相図

この屋敷は、苅田家住宅及び酒造場として、津山市の重要文化財になっている。造り酒屋としては、宝暦8年(1758)に開業し苅田屋と号したという。現状は、表通りに面する間口が十五間半に及ぶ大規模な町家である。

母屋は、宝暦2年(1752)の建築とされる。幕末期に大幅な改修工事が実施され、屋敷の西の端には新座敷が増築された。特徴的な三階の望楼は、明治期のものと考えられている。

江戸時代の津山では、酒を取り扱う営業許可証に相当する株は、造酒株・自国請酒株・他国請酒株の3種類があった。造酒株は、酒の生産に携わるための株で、他の2種類とは異なっていた。自国請酒株は、津山藩領内で生産された酒の販売のための株、他国請酒株は、領外生産の酒を販売するための株で、いずれも酒の製造はできない。

	元禄10年12月	天明元年秋	天明8年11月	天保8年11月調 文化元年6月	嘉永7年8月
造酒屋	81軒	17軒	12軒	15軒	15軒
秋造り	58487石				
寒造り	1921.55石				
造酒高	1980.037石	4596.44石	1921.5石	5600石	



出雲街道絵図、個人蔵

町端在分

東新町の外れからもう少し東の玉琳の辺りにかけては、身分的に農民でありながら、街道筋と城下町に近いという地の利を得て、様々な商売をする者がいたため、城下町の特権商人たちとしばしば争論になっていた。当時の津山では、こうした場所を町端在分と呼んだ。



中之町絵図

堤防に当たる水流の力を分散させたり、流れを制御するための工夫のひとつが「水刎」であった。現在では水制とか沈床と呼ばれる、堤防から川の中に張り出した構築物である。

この構築物は、地域によって形や工法も異なり、また、呼び名も様々であるが、江戸時代の津山では「なげ」と呼んでいた。このなげが最初に造られた時期は確定できないが、津山郷土博物館に所蔵されている城下町の絵図資料からは、少なくとも森時代の終わり頃には既にあったことが知られる。

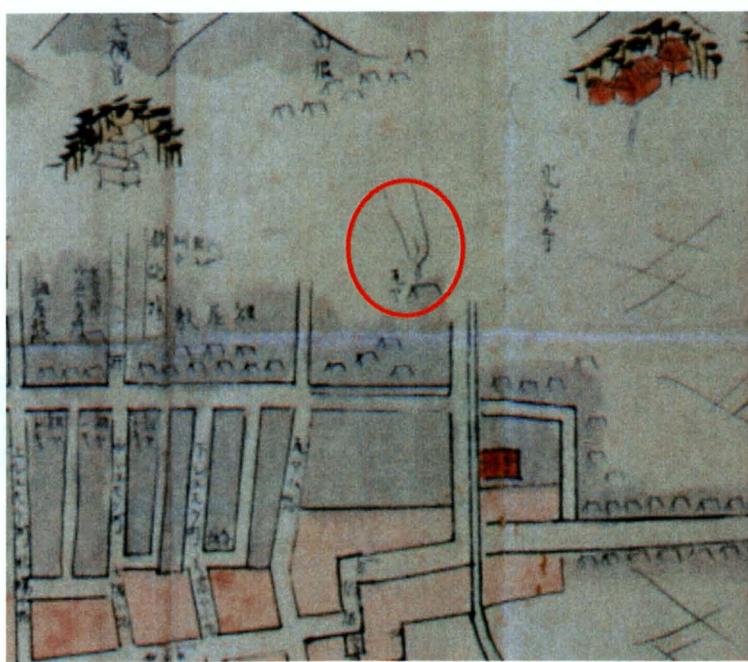
なげの近辺には緩やかな流れのよどみができるので、堤防を下る雁木(石段)が設けられたり、船着き場に利用されることもあった。



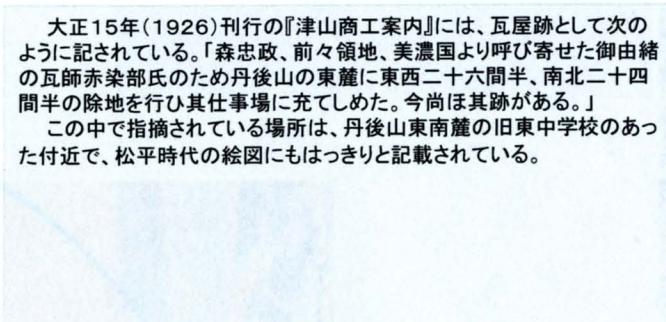
津山画図

百間藪、百間土手

当時の様子を伝える記録によれば、約百間毎に三~四間の空き地を設けて区切ってあり、それぞれの区切りを切り戸と称して、それが一番切り戸から五番切り戸まであったという。これが百間藪の名前の由来という説である。切り戸というのは吉井川への出入口で、城下町に近い古林田や玉琳のあたりの切り戸は、活発に行われた商業活動を支える重要な船着場でもあった。



津山画図、瓦屋

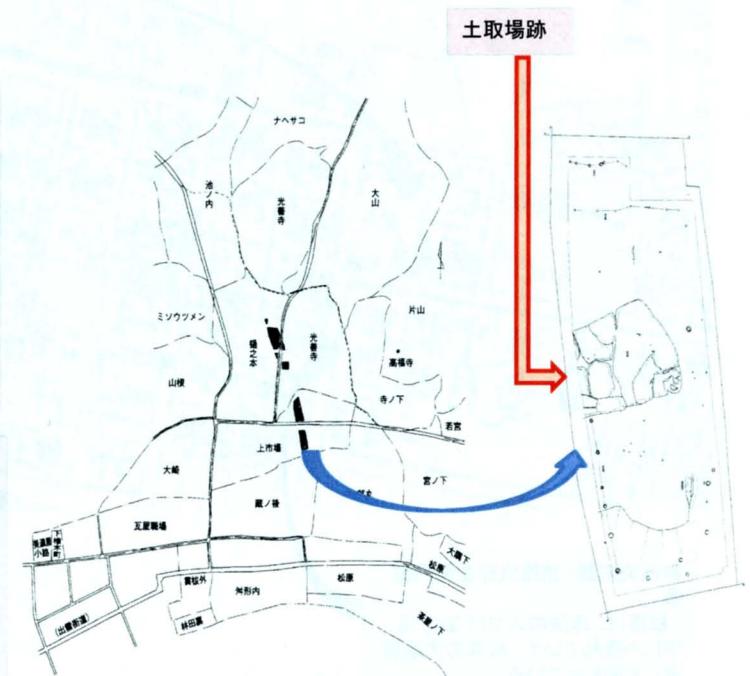


大正15年(1926)刊行の『津山商工案内』には、瓦屋跡として次のように記されている。「森忠政、前々領地、美濃国より呼び寄せた御由緒の瓦師赤栄部氏のため丹後山の東麓に東西二十六間半、南北二十四間半の除地を行ひ其仕事場に充てしめた。今尚ほ其跡がある。」

この中で指摘されている場所は、丹後山東南麓の旧東中学校のあつた付近で、松平時代の絵図にもはっきりと記載されている。

粘土を確保するために土取場が設定され、土取場となった田や畠は、粘土を採掘する期間は年貢が免除される。粘土は同じ場所からいくらでも取れる訳ではないので、粘土が取れなくなれば、場所を替えなければならない。その度に藩に願い書を提出して、同時に、田や畠の年貢の免除も申請することになる。

これらの土取場の多くは、上之町や林田の付近に設定されていたが、松平藩時代には、郊外の日上に土取場を設けている例もあり、手近な場所での粘土の採掘が難しくなった状況がうかがわれる。



林田池ノ内遺跡(津山市)埋蔵文化財発掘調査報告書第75集



西寺町が、後に町名として残されたのとは異なり、東の寺町では町名や地名として残されることはなかった。

この地に集まっている寺院は、丹後山の中腹付近から上に集中しているため、出雲街道のような、主要な街道には面していないが、寺院が集中して東西に続く道は、寺下通りという名で親しまれている。そこには、今も、蓮光寺・千光寺・本蓮寺・大信寺などの寺院が建ち並んでいる。



大信寺の扁額は、昭和の名工といわれた浅本鶴山の作品で、珍しい陶器製の扁額である。

千光寺には、槍の形や酒樽の形など、変わった墓石があることで知られている。また、千光寺のしだれ桜は、見事である。夜間にライトアップされる期間には、多くの人が訪れて、満開の夜桜を楽しんでいる。

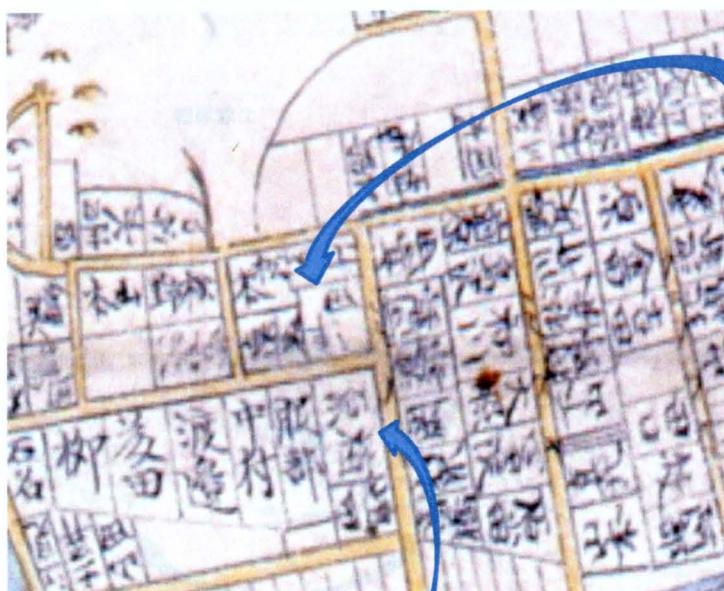
### 石仏

伝承では石仏(いしづとけ)と呼ばれていたが、他の地域で見られるような地蔵などではなく、縦横1メートル50センチほどの平らな石で、表に銘が彫られているが正確には読み取れなかった。

『東作誌』では、「大隅宮東の山の嶺に石仏あり。瘧を病むもの此石仏を荒縄にて縛り、瘧を落とし玉つらば縄解きて免すべし、とて戻るに必其病癒ゆ。其時縄を解て帰る。此山野狐の住所といふ。」と記載されている。

### 安黒谷

丹後山へ登る小さな谷道であるが、その先は、阿黒谷と呼ばれている。かつてそこに居住していた豪族の名に由来すると伝えられている。



神伝流宗師 植原六郎左衛門屋敷

植原は、泳法のみではなく、兵学にも優れていて、幕末の大砲造にも関わっている。

津田真道は、箕作阮甫・伊藤玄朴・佐久間象山らに学び、後には幕府の蕃書調所教授手伝いとなった。オランダ留学を経て、開成所教授となり、明治になると、近代の啓蒙思想に大きな影響を与えた。



### 入道坂

昭和初期に編纂された『苦田郡誌』では、入道坂の由来について、三つの説を紹介している。第一に、森家の刀鍛冶で土佐守正信が、入道してこの地に住んでいたという説。第二に、森家の茶坊主の者が、多くこの地に住んでいたという説。第三に、瀧田覚左衛門の家来で杉原藤八という者が、ここで大坊主に会ったという説。